



大久保 都季（おおくぼ とき） 第六中 3年生

作品名：明日に手を伸ばせ

図 書：空飛ぶ広報室

「失敗したらどうしよう」「もしダメだったらその時どうすればいいのだろう」私はそれまでそう思い、無意識に精一杯努力することから逃げていました。

「最近スランプみたいだな」

「忙しくてあんまり勉強時間なかったな」

部活の試合でミスを連発し、塾のテストでもいい点数が取れなかったとき、私はそう言いました。そんな時に部活の顧問の先生と塾の先生の両方から

「言い訳するな。ただ努力が足りていなかっただけだろう」

と言われました。自分では言い訳しているつもりはなかったし、努力もしていたつもりだったのでなぜそんなことを言われるのかわかりませんでした。そして、

「頑張っているのに」

と内心反抗もしていました。そんな気持ちでいたため、部活に行くのがだんだんと嫌になり休みがちになっていました。

そんな時、私は本の主人公、空井大祐に出会いました。空井はパイロットになるという長年の夢を、あともう少しというところで不慮の事故により諦めざるを得なくなります。そのとき、空井はそのことを自分の中で整理できずしばらくの間泣くことさえできませんでした。そんな空井のことを読んでいくうちに、私はこんなになるまで何かに向かってひたむきに頑張ったことがない、と思い始めました。試合で負けてしまったときも、テストの点数が悪かったときも、私は悔し涙も流しませんでした。それどころか「今回はたまたま」という言い訳を周囲の人と自分自身に言い聞かせてさえました。空井の言葉は私にそれを気付かせてくれました。

私は一生懸命やったのに失敗するということを恐れて、そこそこの努力しかしていませんでした。でもそれは失敗するのが怖かったのではなく、一生懸命に努力した精一杯の私を失敗によって否定されるのが怖かったのだと思います。だから私は無意識のうちに精一杯努力することから逃げて、もしも失敗したときに

「本当の自分はまだまだもっとできるところにいる」

という言い訳ができる隙を作っていたのだと思います。

本を読んで、本当に精一杯頑張ってもダメだったときには、やはりその分だけ傷つくことはわかりました。けれども、空井は傷つき打ちのめされてもちゃんと

次の自分につながっていました。

「自分がパイロットじゃなくなる人生なんて考えたこともなかった。それなのにパイロットじゃなくなっちゃって。でも、広報室に来て鷺坂室長の部下として働いて、パイロットじゃなくても飛べるんだって分かったんです」空井は私に本当に精一杯やった努力は目標に届かなくても、自分の全てを否定することなく、新しい次の自分にちゃんとつながてくれることを教えてくれました。精一杯やった頑張りは自分を裏切るかもしれませんが。でもその努力をしなければ目標の自分に手を伸ばすことすらできません。

私は精一杯努力することから逃げていた自分をとても恥ずかしく思いました。そして、まずは部活の引退まで精一杯頑張りきりたいと思いました。六月にあった引退試合で負けたときは本当に悔しくて、応援に来てくれた母に対してのあいさつは泣いていてお礼の言葉を声にすることができませんでした。部活を引退して、私は受験生になりました。引退試合での悔しさはまだ残っていますが、悔しい思いは受験勉強を頑張る気持ちにちゃんとつながっています。

これから先も私の精一杯の努力が目標を前にして否定されることはあると思います。精一杯やればやるほど悔しい思いも大きくなり時には打ちのめされるかもしれませんが。それでも私は、打ちのめされた精一杯の自分に背中を押されながら、目標に手を伸ばし続けたいと思います。